

◆年中行事

- 一月一・三日——修正会
 - 一月十五日——大般若転読会
 - 二月十五日——涅槃会
 - 四月八日——仏生会
 - 四月下旬～五月上旬——御影堂供華園(瓊花特別公開)
 - 五月十九日——中興忌梵網会(うちわまき)
 - 六月五・六・七日——開山忌舍利会・国宝鑑真和上坐像御開帳
 - 八月二十三・二十四日——地藏会
 - 中秋名月の日——観月讀仏会
 - 十月二十一～二十三日——釈迦念仏会
 - 十二月十五日——お身拭い
 - 十二月三十一日——除夜の鐘つき
 - 春・秋——新宝蔵特別公開
 - 春・秋——結縁写経会
- *日程は変更される事もあるので、あらかじめご確認下さい。

唐招提寺

釈迦念仏会



唐招提寺
四季折々



うちわまき



開山忌舍利会



「瓊花」



拝観時間 8:30～17:00 (受付は16:30まで)

律宗総本山

唐招提寺

〒630-8032 奈良市五条町 13-46
Tel.0742-33-7900 Fax.0742-33-5266
URL: <http://www.toshodaiji.jp>



国宝 金堂



金堂内陣 手前から薬師如来立像、盧舎那仏坐像、千手観音立像



御影堂 上段の間 山雲 東山魁夷画



開山堂 (平成の御影像奉安所)

鑑真大和上と唐招提寺

鑑真和上は六八八年に中国揚州で誕生、十四歳の時、揚州の大雲寺で出家されました。二十一歳で長安実際寺の戒壇で弘景律師に授戒を受けたのち、揚州大明寺で広く戒律を講義し、長安・洛陽に並ぶ者のない律匠と称えられました。七四二年に日本からの熱心な招きに応じ渡日を決意されましたが、当時の航海は極めて難しいもので、鑑真和上は五度の失敗を重ね盲目の身となりました。しかし和上の意志は堅く、七五三年十二月、六度目の航海で遂に来朝を果たされました。

翌年和上は東大寺大仏殿の前に戒壇を築き、聖武太上天皇をはじめ四百余人の僧俗に戒を授けました。これは日本初の正式授戒です。鑑真和上は東大寺で五年を過ごされたのち、七五八年大和上の称号を賜りました。あわせて右京五条二坊の地、新田部(たべ)親王の旧宅地を賜わり、天平宝字三年(七五九)八月戒律の専修道場を創建されました。これが現在の律宗総本山唐招提寺のはじまりです。

金堂「国宝」奈良時代(8世紀後半) 寄棟造・本瓦葺

南大門を入り参道の玉砂利を踏み締めて進むと、誰もが眼前に迫る金堂の偉容に圧倒されます。豊かな量感と簡素な美しさを兼ね備えた天平様式、正面に並ぶ八本のエンタシス列柱の吹き放ちは、遠くギリシャの神殿建築技法がシルクロードを越え、日本まで伝来したかのよう感じさせます。会津八一は「大寺のまろき柱の月かげを土に踏みつつものをこそ思え」と詠み、井上靖は和上の生涯を「天平の夢」と題した小説に書き、その名を世に広めました。内陣には像高三メートルに及ぶ盧舎那仏(るしゃなぶつ)を中央に巨大な三尊「乾漆造(かんしつくり) 国宝」が居並び、厳肅な空間を生み出しています。本尊・盧舎那仏坐像(大仏)は宇宙の中心、釈迦の本地仏として中尊に、その東方に現世の苦惱を救済する薬師如来立像、西方に理想の未来へ導く十一面千手観世音菩薩立像が配されています。本尊の脇士には等身の梵天・帝釈天立像「木造 国宝」が従い、須弥壇(じゅみだん)四隅には四天王立像「木造 国宝」が諸尊を守護しています。創建以来の天平金堂と、内陣の九尊が織りなす曼荼羅世界は、参拝者を魅了せずにはおかないでしょう。

講堂「国宝」奈良時代(8世紀後半) 入母屋造・本瓦葺

講堂は、和上が当寺を開創するにあたり平城宮東朝集殿を朝廷より賜り移築したもので、平城宮唯一の宮殿建築の遺構です。本尊弥勒如来坐像「鎌倉時代 木造 重要文化財」は釈迦牟尼仏の後継で、将来必ず如来として出現し法を説くとされます。そのため通常は菩薩像ですが、本像は如来像として表現され、金堂の三尊と合わせて顕教四仏となる古式で配列されています。持国・増長の二天「奈良時代 国宝」も講堂内部に共に配されます。

鼓楼「国宝」鎌倉時代(仁治元年(一二四〇)) 楼造・入母屋造・本瓦葺

瀟洒(しょうしゃ)な重層の建物で、本来は経楼とみられますが、鎌倉時代に再建されたのち鼓楼と呼称されたようです。一階に和上将来の三千粒の仏舍利を安置しているところから「舍利殿」とも称されます。毎年五月十九日には、鎌倉時代戒律を復興した大悲菩薩覚盛上人(かくじょうしょうにん)の中興忌(うちわまき会式)が行われ、法要後、楼上からハート型の宝扇がまかれます。この鼓楼と対をなす建造物として鐘楼があり、当初の建物は残っていませんが、梵鐘「重要文化財」は平安初期の数少ない遺例でたいへん貴重なものです。

礼堂・東室「重要文化財」鎌倉時代(弘安七年(一二八四)) 入母屋造・本瓦葺

南北に長い建物で、従来は僧侶の起居した僧坊でした。講堂を中心に西と北にもそれぞれ建物があり、三面僧坊と呼ばれていましたが礼堂・東室のみが現存しています。中央の馬道(めどう)と呼ばれる通路で南北に分けられ、南半分の礼堂は解脱上人貞慶(けだつしやうにんじょうけい)が始修された「釈迦念仏会」の会場に改められました。この法要では和上将来の仏舍利・金舍利塔(きんきしりとう)「国宝」が本尊として礼拝されますが、平素は清涼寺式釈迦如来立像「鎌倉時代 重要文化財」が安置されています。

戒壇「石段のみ鎌倉時代」

金堂の西側にある戒壇は、僧となるための授戒が行われる場所です。創建時に築かれたとされていますが、中世に廃され、その後再興されたものの火災により建物は失われました。現在は、三段の石段のみが残り、その上に昭和五十三年(一九七八)にインド・サンチーの古塔を模した宝塔が築かれました。

宝蔵・経蔵「ともに国宝」奈良時代(8世紀) 校倉・寄棟造・本瓦葺

礼堂の東側に並んで建つ校倉(あせくら)様式の建物で、北に位置し一回り大きい方が宝蔵です。南にある小さいほうの経蔵は、唐招提寺が創建されるより前にあった新田部親王邸の米倉を改造したものとわれ、日本最古の校倉です。

御影堂「重要文化財」江戸時代

もと興福寺別当寺院、一乗院の宸殿と殿上の遺構で、昭和三十八年(一九六三)に移築復元して鑑真和上坐像「国宝」を納め御影堂としたものです。昭和五十年には東山魁夷画伯による障壁画が揮毫奉獻され、和上の像を奉安する静寂な宸殿に、一層の荘厳さをもたらしました。毎年六月六日の開山忌舍利会の際、前後三日間だけ御影堂内が公開され、鑑真和上像を参拝することができます。

開山堂と鑑真大和上御身代り像

開山堂は元禄時代に徳川家歴代の御霊殿として建立され、その後明治十四年(一八八二)に鑑真大和上のお像を安置するため現在の位置へ移築されました。国宝の和上像が御影堂へ移されたのち、覚盛上人・聖武天皇・徳川家康を安置した本願殿として参拝されてきましたが、この度、御堂の老朽化をうけて改修工事を行い、鑑真大和上円寂から一二五〇年になる平成二十五年(二〇一三)、大和上のお姿を写した「御身代わり像」がつくられ、再び開山堂として落慶致しました。

御身代わり像(御影像)は、年間数日しか開扉しない国宝の和上像に代わって、毎日参拝していただく目的で製作したものです。この像は奈良時代の脱活乾漆技法(特に国宝和上像)を忠実に踏襲した模造で、平成十二年から始まった金堂の盧舎那仏修理時に得られた知見も生かされております。彩色は、国宝の和上坐像が江戸時代末期の火災で被った形跡を排除して、両頬や上衣、袈裟に残る当初の部分を再現し、正倉院に伝来する伎楽面と同様、荏胡麻油を表面に塗布しました。これも今回の模造過程で国宝坐像を調査して判明した新知見です。

この平成御影像も国宝和上像と同じく、大和上の遺徳を永く伝えていく拠所となります。